

Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



(Photo: Midtown / 8th Avenue)

《ハニー》

ほぼ毎晩、夜 11 時を過ぎた頃…。どこからともなく現れ、自分がお世話になっていたブロードウェイの劇場街にあったレストランの 8th アヴェニュー沿いの窓越しに巻き上げられたシャッターのちょうど真下の辺りに立っていた。

女の名は「ハニー」。本名ではなくあだ名だが、ハニーの職業はいわゆる「立ちんぼ」「ドラッグの売人」みたいなこともしていたようだったが、「コール・ガール」と呼ぶにはゴージャス感に欠けていた。年齢は当時でおそらく 30 代後半から 40 代半ば辺りであったらうか。スパニッシュ系の女性らしかったが、前歯が数本抜け落ちていて、無理やり塗りたくった厚化粧に真っ赤な口紅。そして、いつもミニスカートにハイヒール姿だった。そんなハニーは毎晩 8th アヴェニューに立ち、通り過ぎるめばしい男達に熱い視線と満面の笑みを投げかけていた。

ほぼ毎晩立ち位置は同じ。そして、男達に熱い視線を投げかけるハニーの定位置頭上にある店のシャッターを降ろしに行くのが自分の役目だった。ディナーのラスト・オーダーが終わる頃、11 時過ぎになると 8th アヴェニューに向った。

なぜハニーがいつも同じ場所にいるかという、ちょうどその場所は完全閉鎖状態だった店の裏側のドアがあったため少し窪んでいて、ちょっとしたアーケードもあったため雨の日などは雨宿りができ、程よくライトアップされていたりしてハニーの仕事場としては最高だったのだ。また、ホームレスたちも冬になると寝床にしていたり、酔っ払いが立ちしよん便をしていたり、ゲロを吐いたり、また、ドラッグを売りさばっている怪しい奴もいるなど、結構危ない場所でもあった。

そんな場所でハニーは毎晩仕事に精を出していたものだから、シャッターを降ろしに行く自分とよく遭遇した。初めのうちは「エクスキューズ・ミー」と言ってシャッターを降ろさせてもらっていたのだが、正直、「みずばらしいなあ」とばかりに冷たくあしらっていた。でも、ほぼ毎晩のように会うものだから、そのうちハニーは自分の姿を見かけると「ハイ・ハニー！ ハウ・アー・ユー？」と、歯が数本抜け落ちているためか空気漏れした甘ったるい声で囁きかけてくるようになった。勿論、そんな時でも満面の笑みは忘れなかった。

毎晩のようにその空気漏れした甘ったるい声で囁きかけられるものだから、ハニーに対して妙な親しみを覚えるようになった。だが、とてもじゃないが男心をくすぐるような存在ではなく、ただ毎晩頑張っているハニーが健気に思えてきただけだ。時々、シャッターを降ろしに行くと、ハニーの姿が見えない時もあったが、そんな時は「おっ！ 仕事が入ったのかな？」なんて余計な想像をしながらも、あの満面の笑みが見れなくてちょっぴり淋しくもあったりした。

念を押しておくが、変な下心が芽生える余地など全くなく、端から見ても風貌的にはかなりいただけなかったハニー。それは「頑張れハニー！」という気持ちにさせるくらい気の毒な姿でもあった。そんなハニーの人生にもいろいろとあったのだろう。何も好き好んで毎晩 8th アヴェニューに立っていたわけではない筈だが、かなりドラッグもやっていたのだからと思われるほど肌もボロボロだった。

この「ハニー」というあだ名は、彼女が自分を「ハイ、ハニー！」と囁きかけることから、レストランの仲間が付けたものだ。ディナー勤務後に仲間と共にバーに繰り出す時なども、お構いなしに「ハイ・ハニー！ ハウ・アー・ユー？」と囁きかけられるものだから、「お前まさか?!」なんて変な想像をされることもしばしばあったが、そんなわけでレストランの仲間からは「マサのハニー」と呼ばれたり、「マサのハニー今日もいるぞ！」などと要らぬ心配もされたものだが、それはそれで別に悪い気はしなかった。

あれから 10 年余りが過ぎたが、今も毎晩 8th アヴェニューのあの場所で満面の笑みを投げかけているのだろうか。映画『プリティ・ウーマン』の如く運命的な出会いでもしてくれていれば幸いだが、とにかく体には気を付けて、妙な事件や犯罪に巻き込まれずに元気でいて欲しいと願う今日この頃。

ニューヨークという街には様々な人種だけでなく、様々な夢を持った人や様々な境遇の人たちと出会える素晴らしさもあるが、ハニーも自分にとっては忘れ難い存在で、その姿はニューヨークという街の景色にすっかり溶け込んでいた。(「ヒデさん、僕のあのハニー、どうしてでしょうね?」)